

秋祭り

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード: 作成者: 後, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4790

秋 祭 り

後 あゆみ

- I はじめに
- II 鍋谷地区の秋祭り
- III 秋祭りの変化とその背景
- IV おわりに

I は じ め に

はじめに、“何故、秋祭りを扱うか”ということについて説明する。

鍋谷という地域社会を、そこで行われる具体的な活動を通じて総合的な形でとらえるには、何を題材にすればよいか。活動がムラ全域で行われ、参加者もムラ役員、各団体員をはじめ地域住民全である行事といえば祭りをおいて他にない。祭りというものの具体的な活動、参加者、参加組織、役割を調べることによって、地域社会の全体としてのありかたが浮かびあがってくるはずである。

日 程	行 事	地 区	家 庭
1 / 1	正 月	公民館などにしめなわ	もちつき、初参り、しめなわ
1 / 15	左 義 長	竹でやぐらをつくる	書き初め、しめなわを持ちよる
3 / 9 12 / 9	山 祭 り		人夫と酒宴、温泉旅行
4 / 17	春 祭 り	神 事	祭りのごちそう
7 / 1	氷室の日		酒まんじゅうを食べる
7月 土用の五晩	虫 送 り	生産組合が企画	タイマツ作り
8 / 15	盆	輪おどり、子供すもう大会	墓まいり
9 / 23	秋 祭 り	神事、獅子舞い	祭りのごちそう、志納金
10 / 17	家立ち祭	神 事	

表-1 鍋谷の主な年中行事

まずここで、鍋谷地区で行われる主な年中行事、祭りについて言及する。行事の日程は表-1で示した通りである。おおまかに説明すると、まず正月は2、3日前にもちつきをし、元旦の朝に各家庭の玄関先、公民館などにしめなわを飾る。初参りなど正月の活動は個人で行う。左義長は鍋谷地区全体で行っており、当日、竹でやぐらを作ってわらを積み、各家庭から持ちよった書き初め、又しめなわなどの正月に使った物も焼いている。消防団も火の始末のため参加している。山祭りは年に2回あるが、どちらも個人で酒宴を開き、山神様をまつるものである。12月のものは山仕事の道

具を神棚に供え、もちと赤飯で祝う。春祭りは氏子総代が神社参拝をし今年の豊作をいのるものである。獅子頭を公民館に飾るほかは、各家庭で祭りのごちそうを食べるだけである。氷室の日はこの日に氷室まんじゅうを食べると夏バテしないといわれているため、鍋谷でも酒まんじゅうを買って食べる家庭が多い。虫送りは稲の害虫であるコンカ虫を退治するため、タイマツに火をつけ田のあぜ道を太鼓を鳴らしながらねり歩くものである。タイマツは前日に個人の家で作り、夕食後、地域住民総出で虫送りが行われる。太鼓も独特の鳴らし方がある¹⁾、鳴らす人がほぼ決まっている。最近では虫送りは実益よりも娯楽を目的としており、見物人を呼んだりして子供らも楽しみにしているらしい。盆は15日に迎え火をする。送り火はしない。夜には青年団主催の輪踊りが行われる。また神社の境内の土俵で子供ずもう大会も行われる。秋祭りは氏子総代による神社参拝、小学校6年生女子による巫女舞い、新婚夫婦と19歳の女性の厄年のお祝い、そして青年団中心の獅子舞い、子供たちが引く子獅子などが行われる。鍋谷地区あげての行事で予行演習や練習も加えると、秋祭りに費やす時間と参加者の数は他の行事と比べるとはるかに大きい。家立ち祭り(神明祭)は杉本庄兵衛翁の家立ち事業の記念と戦没者の慰霊のために行われる。氏子総代が庄兵衛翁をまつてある祖霊社に参拝した後本殿に参拝し、御神酒を飲んで祭りは終わる。

以上が鍋谷地区で行われている主な年中行事である。これからもわかるように、秋祭りは年中行事の中で地区全体が組織されている最大の祭りである。よってここでは秋祭りを通して鍋谷という地域社会の特質を考察してみようと思う。

Ⅱでは昭和61年度の秋祭りの概要について述べる。そしてⅢではその活動、組織、歴史的変化、その変化を引きおこす要因について考察しようと思う。

Ⅱ 鍋谷地区の秋祭り

昭和61年度の秋祭りは9月23日に行われた。午前9時頃から獅子舞いを皮切りに活動は始まりおなじく獅子舞いが全て終わった日没頃に終わった。この日は晴天であり、何の妨げも無く祭りは進められた。

秋祭りの内容はその実際の活動の場をもとに以下の3つのカテゴリーに分けられる。まず、神事を中心に鍋谷地区の中央にある八幡神社で行われる活動、これを神社サイドの活動と呼ぶことにする。次に街路でのパフォーマンスである獅子舞い、これを獅子舞いサイドの活動とする。最後は、各家庭で行われる秋祭りに対しての活動、これを家庭サイドの活動とする。秋祭りの活動として表面にはっきり出るのは神社、獅子舞いサイドであり、本文でもこの2つを中心に話を進める。家庭サイドは実際に目で見ただけのものではなく、ほとんどは聞きとりが中心である。

1 神社サイドの活動

まず神社サイドである。鍋谷には神主が不在なので、鍋谷地区の八幡神社の本社より、神主が出張してくることになる。その神主への手当ては足代として区の神社費から12月に1年分払うこ

とになっている。秋祭りには神主と楽人の2人が出張してくる。

神社サイドの活動の主な直接の参加者は、神主と楽人、志納金の受け付け、その他祭りの運営にあたる地区役員、巫女舞いを演じる小学校6年生の女子、お祓いをうける19歳の厄年の女子と新婚夫婦である。あと、拝礼にくる地区住民有志がそれに加わる。

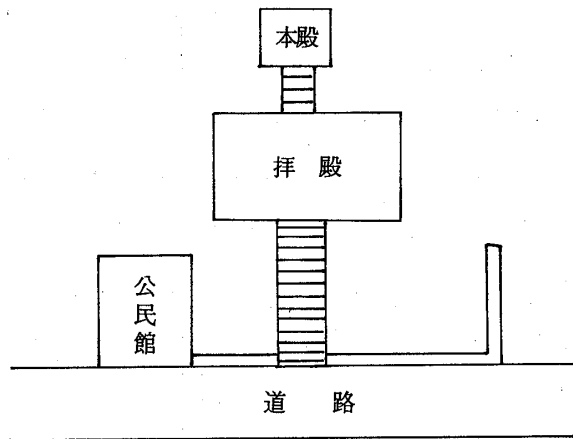


図-1 鍋谷の八幡神社の配置

時刻	活動
10:00	公民館にて神主、巫女の着付 巫女舞いの予行演習
12:00	獅子舞い連中へのお祓い
13:00	巫女舞い 氏子総代の拝礼 厄年のお祓い 新婚夫婦のお祓い 神社内にて宴
14:00	公民館にて神社、村役員らが宴

表-2 神社サイドの活動

午前中、図-1でもわかるように、神社に隣接した公民館で神主と巫女の着付けをする。神主は自分で衣装を持ってきて、着付けも自分で行う。巫女は地区が所有する衣装を、巫女を演ずる少女の母親が着付ける。着付けの専門家は使わず、母親らが自分の経験や手伝いの地区の女性の話をもとに着付けていた。その後、余った時間を利用して巫女舞いの予行演習をする。神主と楽人も笛と太鼓のかわりに机などを鳴らし、拍子をあわせて協力する。

公民館はこのように神社での活動の準備、獅子舞い連中の休憩の場、宴の場として利用される。公民館内には地区の女性が世話係として常時いることになっている。この女性たちは婦人会員が主である。

神社に地区住民が集まり出すのは正午すぎからである。神社の戸、窓の類は開け放たれ、床には蓑蔭が敷きつめられる。地区役員が最前列に座り、お祓いをうける厄年の女子と新婚夫婦がその左側後列に座る。そしてその後ろには前記の人々の家族や拝礼希望者等が座る。

志納金の受付も人々が集まり出す頃から始まる。神社拝殿の入口前にテーブルが出され記帳担当者、そして出資者と金額を半紙で墨で記す担当者の3名がそのテーブルについており、出資者は列になって順番に志納金を納めていた。出資者と金額が書かれた半紙は神社拝殿内の壁に一列にはりだされる。志納金受付は神事の最中でも行われ、付加分の半紙も神事の最中、壁にはり加えられる。

正午すぎ、まず神社前に巡ってきた獅子舞い連中に対して神主がお祓いを行う。獅子舞い連中

は3列程度に並び拝礼する。その後、神社前で獅子舞いが舞わされる。

獅子舞いが神社前で行われている午後1時過ぎ、平行して神社内での神事も開始される。まず拜殿の上段の間(奥殿に向って)左側に各区区長と総区長の計5人が座り、右側に神主と楽人が座る。

そして巫女舞が始まる。巫女舞いは毎年鍋谷地区に在住する、その年度の小学校6年生女子と決まっている。人数が多くても選抜するという事は無く、全員が巫女舞いを演じる。また逆に人数が1人以下であれば5年生女子が全員参加することになる。この際も5年生女子の中から不足人数分を選抜するのではなく、全員参加する。巫女は2人1組となって本まわりの舞を舞う。今回は3人の小学校6年生がいたが、3人とも2回ずつ舞を舞った。つまり全員が同じ回数舞うようにしているのである。舞いが終わると3人の巫女は、玉串を氏子総代である各区区長、総区長に渡す。渡し終わると巫女は神主の横に座わる。そして氏子総代の拝礼が始まる。玉串を受け取った氏子総代は一列に並び、2礼2拍手をし、玉串を神前に捧げる。拝礼が済むと彼らは上段の間から降り、拝礼希望者たちの最前列に座わる。巫女も同じ時に上段の間から降りる。巫女は上段の間から裏口をまわって廊下に出るが、その際、総区長が彼女たちを呼びとめ、ねぎらい、「おてま」(千円程度の現金)を渡す。「おてま」を受け取った巫女はそれぞれうれしそうに母親の元へ行き、公民館へ着替えるため去って行った。

ここで総区長が立ち、お抜いの進行役をする。総区長が19歳の厄年の女子3名の名前を呼び、神社に集まった地区の住民に紹介する。名前を呼ばれた女子は立って上段の間に上り3人横列に並ぶ。そして神主が厄年のお抜きをする。

続いて新婚夫婦のお抜きである。同じく総区長が立って1組ずつ紹介を行ってからお抜きが始まる。今回は2組のお抜きが行われたが、そのうち1組は夫が獅子舞い連中であるためお抜きには夫の父親が代理でお抜きを受けた。このことも総区長はユーモアをまじえて紹介し、終始なごやかな雰囲気でお抜きは終了した。

最後に総区長が拝礼に訪れた人々に対し感謝の意を示すあいさつを行った。そして、付加えるように、秋祭りとは関係のない伝達事項も、この場を借りて伝えていた。そして神主が公民館に去った後、神社内で希望者による酒宴が行われ、皆なごやかに談笑しあっていた。一方、公民館では、神主と総区長、各区区長らがなごらいの席をもうけていた。この際、総区長によって今回の秋祭りの反省もされていた。

2 獅子舞いサイドの活動

獅子舞い連中は、青年団、壮年団の男性のみで構成される。役割分担と人数は表-4の通りである。棒振り方の中心は壮年団員である。練習は2週間前ごろから棒振り方を中心に、夜、公民館前で行われる。振り方は戦前15手あったが今は9手に減っている。前日には公民館で役割分担の確認や衣装の打ち合わせが行われる。当日、準備などは全て公民館で行われる。獅子頭には大獅

子、子獅子と呼ばれる大小2種類がある。休憩時には公民館1階の広間に安置場所がもうけてあり、そこに置かれる。獅子舞いには、その獅子頭をはじめカヤ、三味線、笛、棒振り方のかつらと棒、テープレコーダーが使用される。衣装は地区所有のものを使い、自分で用意するものは表-5の通りである。

時刻	活動
2週間前	練習開始
当日 9:00	神社前集合、獅子舞い開始
12:00	再び神主前集合 神社前で舞わした後休憩
14:00	再開
18:00	神社前集合、解散

表-3 獅子舞いサイドの活動

役割	人数
三味線	5
笛	9
太鼓	3
花	5
棒振り	17

表-4 獅子舞いの役割と人数

棒振り方	囃方その他
襦袢	着物(ウール)
袴	たすき 1色で2m
たすき 3色 3m 50cm	帯、角帯
白地下足袋	白足袋
さらし	豆紋り鉢巻
豆紋り鉢巻	下駄、雪駄
下着(ステテコかパンツ)	前掛け

表-5 獅子舞い衣装(各自持参するもの)

当日の朝9時に着替えを済ませた獅子舞い連中が神社前に集合し、総区長のあいさつをうけ、いよいよ本番を行う。獅子を舞わず順序は図-2の通りである。まず奥鍋谷から神社へ向って舞わしながら進み、正午に神社前に到着する。そして神社前で舞わした後、昼休憩をとり、午後は口鍋谷(寺島の一部も含む)から神社に向って舞わしながら進む。つまり神社方向に獅子の尻を向けて舞わずことは無いわけである。棒振りは2人1組になり、獅子頭を持つ人とともに交替制である。移動の際は全員で獅子のカヤを引き、囃はこの際だけあらかじめ録音しておいたものをカセットテープで流しながら進む。花は実際はほぼ全戸が出す。金額は2千円程度と聞いたが、志納金のように明示はしない。花代は独立会計になっている。獅子舞いは花の出た家を5軒ほどまとめて1回舞わす。休憩場所は公民館と決まっており、地区の家々で休むことはしない。しかし有志の家々がねぎらいの酒を出すことも多い。

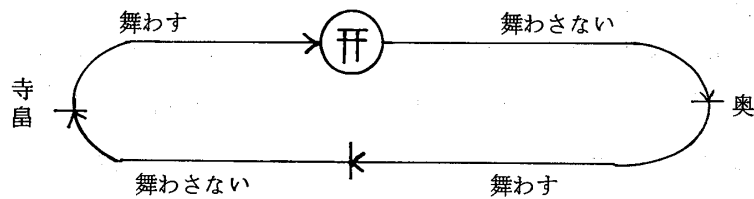


図-2 獅子舞いの経路

正午、獅子舞い連中は神社前に再集合し、お抜いをうける。そして神社前で獅子舞いが行われる。これは各戸で舞わされるものより長く正式な舞いであった。また余興として「にわか」と呼ばれるホットコやハンニャの扮装をした人（これも獅子舞い連中の人扮装している）が子供たちを驚かせたり、からかったりして場を盛り上げていた。この「にわか」は今回初めての試みで、壮年団員の1人がもっと祭りを盛り上げようとして提案したのが実現したそうである。

また、この獅子舞い連中の大獅子とは別に子供たち有志による子獅子もある。子獅子は台車に乗せられ、子供たちに引かれて動かされる。午後、神社前から大獅子と一緒に出発し、寺島で休憩した後、すぐ神社前まで戻ってくる。子獅子を引いた子供たちには「おてま」としてジュースやアイスクリームが与えられる。

獅子舞いが各戸を舞い終えて神社に戻ってくるのは日没近い午後6時頃となる。

3 家庭サイドの活動

最後に家庭サイドに話を移す。各家庭が秋祭りにどんな活動をしているかということである。我々が秋祭り中に伺った家庭では、笹寿司を赤飯といった祭り用の「ごちそう」を作っていた。また年配者の多くは獅子舞い見物に出たり、神社へ行ったりしていた。子供も神社内や獅子舞いのまわりに大勢いた。しかし、逆に全く祭りには関わっていない年代層がある。小学校高学年（6年生女子を除く）から高校生（厄年の女子を除く）までの年代である。2、3人の女子が神社付近にいるのを見ただけであとは全く見なかった。ある家の男の子は他村に出ていたり、ずっと家で遊んでいたりと、全く祭りに関心を示していないように見えた。また、その年代以外でも昼頃に農作業を行っている人々もいた。このように各家庭での秋祭りはかなり受けとめ方が違うようである。

4 まとめ

以上見てわかるように、秋祭りには地区全体の行事として、全世帯が何らかの形で参加している。各世帯は志納金や神事への参加によって参加している。地区役員は氏子総代として拜礼を行う。婦人会は、公民館で世話をし、青壮年団は獅子舞いと、各団体ともそれぞれ活動を行っている。

また、鍋谷地区では4区が秋祭りにそれぞれの区によって特別な活動をしているということは

無い。鍋谷地区全体が一つとなって秋祭りは行われる。

しかし、個人別には参加の仕方にレベルの差があらわれている。地区役員や各団員は積極的な役割で参加しているが、その他、各世帯の人々はそれに比べ消極的である。参加しない年代層は、家庭サイドの活動で述べた通りだが、その中で唯一参加している、厄年の女子や巫女舞いの少女も、その時のみの参加で、前後の時期では全くの不参加である。

Ⅲ 秋祭りの変化とその背景

1 変 化

秋祭りの神事を中心となる八幡神社は、かつて鍋谷が7区あった頃のそれぞれの宮を統合した神社である。かつての7宮はそれぞれ大宮、上の宮、中村の宮、お坊の宮、殿村の宮、ふじの宮、水無の宮という。統合された今は、ほとんどがその跡しか残っていない。

戦前の秋祭りは日程が9月17、18日であった。これは最近まで同じであったが、青壮年団が獅子舞いを主催するようになった昭和58年度から9月23日へと変更された。理由は、獅子舞いを舞わず青壮年団員としては9月23日の方が祝日で、会社が休みであるから助かるということであるそうだ。

戦前の秋祭りは日程は鍋谷地区全域で同じ日に行っていたが、それぞれの区で内容は違っていた。まず、獅子舞いは殿区だけのものであり、みこしは殿区に対抗して奥地区が奥地区だけで始めたものであるというのが最大の特徴である。

戦後（昭和30年頃）、秋祭りから獅子舞いが消え、しばらく神事みの秋祭りが続いた。そして、昭和55年の公民館設立を機に、当時の公民館長の提案で、獅子舞いは鍋谷地区全体のものとして、昭和56年に復活した。復活にあたっては当時の30歳代が主力となって、他の地区に聞き取りに行ったり、鍋谷地区の戦前の獅子舞いを知る人に教えをうけたりという努力を行った。そして獅子舞いは秋祭りの中で定着し今に至っている。加えるに昭和61年からは「にわか」という新しい試みも加わり、活動も活性化してきている。

2 背 景

まず、秋祭りの関係者がどんな目的で何故参加しているかを考えたい。

まず、獅子舞い連中であるが、彼らは青壮年団員として、鍋谷の秋祭りを盛り上げたいというのが第一の目的であろう。また個人的な理由としては、“皆が出てがんばってやっているから”といった青壮年団の和を大事にしたいという理由が大きいだろう。青壮年団員は幼少時より同地区で育ち、お互い同じ小・中学校を出ていることもあり、和も強いと思われる。この獅子舞い連中は祭りの参加者の中で最も精力的に秋祭りに参加しているように見える。

次に地区役員、各区区長、総区長であるが、彼らは義務として秋祭りを盛りたてなくてはいけないという使命感から参加していると思われる。

獅子舞い連中と地区役員らは共通して、祭りを地区の統合のシンボルとして捉え、自らがそのことを自覚して参加している。

拝礼にくる一般の人々は、毎年行われている祭りに対しての、消極的ながら参加の義務感を持っていると思われる。最も参加に消極的な者であっても、志納金、花代は最低出資している。

お抜いに神社にくる人々の中でも、小学校6年生の巫女舞いには、そのような義務感以上のものを感じる。仕方なく参加するのではなく、楽しみにしている部分があると思われる。一般の拝礼客も、巫女舞いを見て、「私の時はこうだった」「早く6年生になって巫女をやりたいかったものだ」と語りあっていた。今回の巫女舞いの少女らも、衣装を着て喜んだり、「おてま」をもらって得意そうに母親に見せていたり、楽しそうであった。また、6年生の少女や厄年の女子、新婚夫婦を見て、「〇〇さんの家の〇〇ちゃんも大きくなった」と拝礼に集った人々が言うように、村内で顔見せ、おひろめのできる唯一の機会といった意味で参加している人も多だろう。

以上、述べた関係者たちは、それぞれ、自分なりの目的を持っていると思われる。しかしここで、祭りに参加しない人々に目を向けたい。

まず、小中高校生である。それも特に男子と限定しよう。何故なら彼らは、将来、獅子舞い連中として秋祭りを盛りたてる人材であるにもかかわらず、参加どころか全く関心も示していないからである。学校があるから、準備段階での参加ができないため、当日での参加もしないのであろうが、将来の秋祭りを担う人材がこうも無関心では不安を感じないのだろうか。

次に活性化の要因について考える。

第一に公民館の設立である。村民の活動できる共同の場ができたことが、村民の中にまとまりを作った。それ故、獅子舞いの復活にも応じたのである。

しかし、復活への努力はたいへんなものだったらしい。文献調査、他地区の獅子舞いの研究、戦前の鍋谷地区の獅子舞いの聞き取りなどが実際に行われた。そして、できあがったものは、「昔はこんな獅子舞いをやっていた」という理想型のコピーであった。コピーはあくまでコピーであり、昔の獅子舞い(これが実際の理想型)を知る老人からは、「昔のものまではいっていない。昔はこんなものではなかった」という評価が下される。その評価を聞き、獅子舞い連中は、一部妥協しながらも²⁾、昔のものに近づけようと努力する。この努力が非常に意味のあるものである。こういう評価が出ている限り、努力は続けられる。しかし、完全な理想型になることはまず、ない。よって、鍋谷地区の秋祭りは、年々、活性化していくに違いない。今回から新しく始まった「にわか」のヒョットコ、ハンニャの参加も、「昔の祭りはにぎやかだった」という評価に刺激されて、出てきたものである。このように、年々努力し続け、新しいものを生み出すという精力が鍋谷の秋祭りを支えているのである。

第二に、新しいことを生みだそうと提案するイノベーターがいるということもあげられる。イ

イノベーターの発案力とフォロワーの実行力がうまくかみあって、どんどん新しいことが定着していく。このあたりも、今の青壮年層の強さである。

最後に、秋祭りの問題点として不参加、無関心層について述べたい。

先にも述べたように、こういう不参加、無関心層がいることによって、将来の秋祭りに不安がないかということである。これは秋祭りに限ったことではない。秋祭りへの無関心はつまり、鍋谷地区への無関心につながる。

ここには2つの可能性がある。ある少年が学校を出、就職した際、鍋谷地区に残るか、外へ出るかである。外に出た場合、鍋谷とは里帰りする年数回のつきあいしかなくなり、当然のごとく関心はなくなってしまう。逆に近辺に就職し鍋谷地区から通うことになったり、鍋谷地区内で職を得た場合、当然、地区の各団体に所属せねばならず、つきあう人間も、鍋谷地区の人々が大きな比重を占める。そうなれば、必然的に、鍋谷地区の統合を大切に思う方向に向っていくのではないか。すると、地区への関心も当然、出てくるというものである。

この可能性は半々ではない。鍋谷地区が彼らにとってどんな存在であるかで、かなり左右される。そこで、地区から、彼らへの働きかけが必要ということになってくる。

家庭での働きかけも大きな意味を持つ。父母が鍋谷地区に対し、関心を持っていれば、子供もそれに見習うことにならないだろうか。

このように、無関心層にいかに対処すべきか、家庭での鍋谷地区の意味をいかにもっと重要にするか、が今後の課題になるであろう。

こういった問題を、現在の活力のある青壮年団、地区役員らがどう解決していくかが、興味のあるところである。

IV おわりに

以上、秋祭りを通した鍋谷の姿を書いてきた。しかし、これは現在だけの姿である。これから秋祭りがどのように変わるかわからない。先に述べたイノベーターとフォロワーが健在である限り、変わる可能性というのはもちろんある。また、将来への不安も解決されるかどうか、まだ明らかではない。

このレポートで結果を書けないのが残念である。

注)

- 1) 「でていけでていけコンカ虫でていけ」という意の太鼓を鳴らす。(K氏)
- 2) 移動の際、カセットテープレコーダーで囃を流すことなど。